

佑 啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

ぐちゃぐちゃだア

三股 金利

和田浦の初春を祝う会に、呼ばれた。開所からもう十年も経つのだ。今年は二十歳を祝う人がいないとのことで、還暦のお二人がお祝いの対象。そういう私は目の前だ。ということは若い人達からみれば・・・ならば、じじいの悩みを聞いてたもれ。

つい最近のことである、建設会社の人と話をした。仕事は増えつつあるのに、職人の手配が出来ないという。復興需要で東北に集中しているだけでなく、鉄筋工や型枠大工のなり手がいないのだそう。みな高齢者で将来を憂いていた。また、公共事業はあるのだが先の事情から、職人の人件費が高騰し、入札への応募も躊躇しているらしい。数年前、タイル職人の親方もこぼしていた。「道路工事の交通整理のほう金がいいんだっただら苦労して職人になるうとするヤツはいねえよ」と。

世の流れで経済はがらりと変わる。いい時もあれば悪い時もある。しかし、新たなインフラの整備や古くなった建物、高速道路やいつ崩れるか解らないトンネルの改修や耐震工事など、

職人の手に委ねなければならぬものはたくさんある。日本から技術が消えていくことを想像するだけで恐ろしい。新幹線の鼻先だって叩き出しの手作業で作られたのを忘れてはいけない。宮大工がいなくなれば文化財さえない。今後も彼らを必要としているのだが一人前になるのに数年或いは十年単位という修行は、今の若い人達には考えられない領域なのだろう。苦勞を避けて通る迂回路はそんなにはないはずなのに。

私は、高校の時に植木屋になりたと言った笑われた。職人の世界が好きである。都会では、とび職も電車で通勤する。ニツカボツカで道具がたくさん収納できるようなベルトを見ただけで、高層ビルの狭い足場で働く姿を想像し、茶髪だろうが、ピアスだろうが技量の世界が超越してしまつて簡単に許せてしまう。

その世界には親方や棟梁という頼りになる存在がある。無口で愚直でどこか近寄りたく、筋の通らぬことは許さない。時には烈火のごとく、親よりも真



剣にぶつかってくれる。今の若者にはそんな人間が・・・。それよりパワハラで訴えられて希少生物は姿を消してしまいかもしれない。日本にとってこれほどの損失はない。

対等や平等のまやかashiによつて上下関係を忌み嫌う風潮になつてしまつた。天井だって寿司だつて上や並があるではないか、酒だつて千壽や万壽などとランクがある。昔はジョニ黒飲みたかつたけど赤(サントリーレッド)でがまんしたものだ。どんなフランク料理よりもY野屋の牛丼が好き。な人がいる。(あるとき、つゆだけと頼んでいる人がいて、何だろうと思つていたら、つゆだくだつた。ライスだけ買いに来る人もいるのだから、つゆだけご飯も売ればいいのに)

みな同様の思考回路と行動、えさを撒かれた動物みたいだ。責任の所在が集団になると曖昧になる、安心感を求めてか。「主語が複数になると述語が暴走する」とウヨクの親分が映画監督の言葉を紹介した。私たちではなく、私という個人の覚悟が大事なのだ。責任をとるという意志がそこにあれば、異なる考えを認めるふところも深くなるはずだ。だが私は、調和を重んじ同調する世代。異端力を発揮するのは若い世代に任せよう。



福祉の世界に入つてこの人達の為などと言っている人に限つてあつさりと言つてゆく。社会も勿論そうであるがきれいな事ではすまないのだから。自身を振り返つてみて、雑多な煩惱と感情のばらつきを、人間関係や社会から逸脱しないように我慢させてい

るのである。いい人であらねばというしほりから逃げたい気持ち。昨今の障害者虐待の事例をみても、自分の危うさを知っているのだろうか。限界を知っているのだろうかと思うことがある。新任の職員には、自分を俯瞰して欲しいと話している。幽体離脱。自らの感情が飽和状態になったり、サディスティックになったりしてないか。かをもう一人の自分が見ている。それでも、やっぱり人間は弱い。どこかで抑止力が働かなくなると、その力をどこに求めるかと言う話をしたら、偉い先生は鼻で笑つた。即座にこの人は、人間の弱さも現場の苦悩も知らず、きれいな事で飯が食える世界の人だと解釈した。

成長過程で、暴走しそうな衝動を何とか止まらせた言葉があつた。母親が言つた「世間様」。祖母の「母親を悲しませないで」。いじめや暴力、格差という言葉を目や耳にしないときはない。一つの事象が起こると、善人が群れをなして襲いかかっているように見えて怖い。テレビの人も記者も糾弾しているうちに、正義の伝承者とも思っているのだろう。でもそんな立場の人でもセクハラで逮捕されちゃったりする。するとまた格好の餌食にされる。こんなところにいじめの心理の一端が潜んでいるのである。

マイケル・サンデルの自熱教室「15歳の君たちと学校のことを考える」を見た。いじめの問題では、ある者は、法律を作れという。反対派は、法律ではなく、みんなで改善していくというような場面があつた。虐待防止法が、



成立した背景を思いながら不祥事があると法律を作るという流れにも疑問が生じた。法律は全部で千八百近く、政令・省令を含めると七千を超えるらしい。しかし、ルールで縛ることに限界がある。数がふえても法律は全能ではない。人間が劣化すればそのたびに規則を作らねばならない。今まで何らかの力が働くプロセスがあつたはずである。失つたもののへの回帰、再生を考える時期である。

若い人達が、新興宗教にすがる時代もあつた。結果、不満のエネルギーは反社会という形に転化し事件になつた。現在も僧職男子が人気だそう。坊主バーで若い女性客が人生相談をしているというので覗いてみたい。

どんな仕事を糧として、どう生きるべきか。確かに大切である。人間だつて動物だから、食べ物を取って排泄して生きている。人間以外の動物や植物も食糧や栄養を求めて毎日毎日同じ活動の繰り返しによつて種をつないでいる。たまたま、人間だけが食糧以外のモノに価値を見だし、持つ者と持てない者が出てくるのだが、日本では少なくとも生きられないという厳しい状況にはない。民族対立も宗教対立も、自由を求める紛争もなく命を脅かされるような恐れもない。仕事の選り好みをしなれば生きてはゆける。社会保障システムもある。時には餓死のニュースもある。れるが、制度の問題より、人との繋がりやたれた結果の方が大きい。食べるものや命に関わる医療が全く受けられないという事態はおよそないと思つていい。

福祉現場では経済が冷え込んだりすると、就職したい人が増え



るということもあつたが、そんなことはなくなり、人材確保が大変である。給与が安いと言う風評も情報を得ればすぐにわかること。直接人間に関わる仕事を避けていくような気がしてならない。こんな人手不足と失業は何を意味しているのだろうか。

ワークライフバランス、自分に合う仕事がない。そういう悠長な事が言える状況なのだろうか。

生きるこの意味がわからない？

「おれだつてわかんねえよ」



路上でひげ面のおじさんが売っていた冊子を買つた。週刊誌は、政治や芸能人のゴシップを派手に書いた中刷り広告だけでなく十分なので暇つぶしのつもりだつた。三百円渡し、足早に歩き出した後から。「すみません」ひとつが五十円だつた。指摘されて払いなおした。「足を止めさせてしまつてすみません」こつちが悪いのに気をつかわれた。表紙をめくると漢字混じりの鉛筆書きのコピーがはさんであつた。

今僕はホームレスです。今の自分にはたすけることはむずかしいけどこれから「ビッグイシュー」をたくさん売って一日も早く、社会復きして、ふつうのお手伝いをしていきたいと思ひます。

頭蓋骨の中身がまた揺れ出した。

(大塚福祉作業所所長)

息子と共に

入江 和子

現在三十七才になる息子が、新設された「ふる里学舎静風荘」に入所させていただいてから、まもなく二年になろうとしています。重い障害を持つ息子は、殆んど身の回りの事が介助なしにはできません。息子が「脳性マヒ」という病気でわかったのは、一才八ヶ月の時でした。医師からこの病名を告げられた時から私達夫婦にとつて長く苦しい試練が始まりました。何も知らずにすやすやと眠っている息子の寝顔を見るたびに、止めどなく流れる涙をどうする事もできませんでした。

この病気は、早期のリハビリが必要ということになり、二才になつてすぐに都内板橋区にある「整肢療護園」という障害児のための訓練施設に三ヶ月間の母子入園をすることになりました。この施設は、同じような障害を持つ親達と寝起きを共にし、何のためらいも隠し事もなく語り合うことができ、悩みや苦しみも少しずつ取り払われる場となりました。そのような中で息子の表情にも日一日と変化が見え始め、特に言葉の面で発達が見られ、家族を喜ばせてくれました。退園後は、この園で紹介していたいたいた袖ヶ浦市の「福祉センター」に週一回外来訓練として通い始めることになりました。丁度その頃、昭和五十三年四月長生郡睦沢町に障害児の保育と訓練のための通園施設「つくも幼児教室」が開園され、二才半になった息子と共に母子通園をさせていただけることになりました。こもも早期療育の場となり、三年半お世話になりました。昭和五十六年十月、六才になった息子は足の手術が必

要となり、新設間もない「千葉リハビリセンター愛育園」に単独入園することになりました。手術のためとはいえ、親元を離れた生活は、息子にとっても私達にとっても、正に試練の日々でした。その後も術後訓練が重要ということで、二年九ヶ月入園しつづけました。この間昭和五十七年四月に愛育園に隣接する「袖ヶ浦養護学校」に入学しています。小学部三年の夏休み前に愛育園を退園することが決まり、私は、車の運転免許を取得し、家から学校まで車で母子通学するようになりました。その後、中学部二年になって更に専門的な訓練と継続的な検査が必要になり、愛育園へ再入園しました。愛育園には、合わせて五年間お世話になりました。



その後、十二年間お世話になった養護学校を卒業し、同時に地元にある「長生厚生園」という施設に通園させていただけることになりました。ここでは、職員の方や先輩園生達の援助を受けながら、段ボールの組立作業等が日課になります。この頃になると、息子の身体も大きくなり、家での介護が私達夫婦にとって体力的にとっても大変になってきました。このため、息子の将来を考え、「鶴舞荘」に入所させていただくことになりました。再び親元を離れての生活に息子も不安があったようです。鶴舞荘では、職員の方々の暖かい介護とご指導を受けられたことで、次第に不安は解消していき、荘での生活に慣れていくのがわかりました。平成二十年五月に、私が脳の病

気で大手術を受けることになってしまいました。幸い経過は良好で、現在は、年一回の定期検査だけを受けています。鶴舞荘には、十五年もの長い間お世話になりましたが、荘の廃止に伴い、平成二十三年七月から新設された「ふる里学舎静風荘」で面倒を見ていただくことになりました。

広い緑に囲まれ静かな環境の静風荘は、全員個室の上に職員の方々の手厚い介護とご指導のお陰で、息子はもとより入所者の皆様も満足されていると思われます。私達夫婦も感謝の気持ちで一杯です。

最後になりましたが、重度障害者の介護や指導は、専門家でも大変な事が多々あると思われすが、私共もできる限り協力させていた

時を重ねて

星 優貴子

私はふる里学舎で働かせていただいて、今年で10年になります。改めてこの年月を振り返ったときに、最初に思い浮かんだのは、笑顔で「ただいま」と作業から元気に帰ってくる利用者さんの顔でした。これは今でも私が「生活係」で仕事をしていた一番好きな瞬間です。私は、大学を卒業してから一年間は、アルバイトをしながら翌年の教員採用試験に向けて勉強を(本当の)ところはダラダラと)しているところでした。そんな時にふる里学舎の求人を見つけ、働きながら勉強をしてみようと思い、ふる里学舎に面接にやってきましたのが始まりでした。後々里見理事長から聞いて、よく採用していただけたなと思うのは、面

接の際に里見理事長に「教員採用試験は今年も受けますか」と聞かれ、「もちろん受けます」と答えたそうです。私自身全く記憶にありませんが、嘘でも「教員採用試験は受けずに、ふる里学舎でがんばります」と言えなかつたものかと。こんな私を採用していただいて、しかも10年も勤めることになるなんて、当時は思ってもいませんでした。

ふる里学舎には「生活係」と「作業係」があります。作業係は日中に利用者さんと一緒に生産活動をする一方、私の所属している「生活係」は日常生活全てにわたること、掃除や修繕、行政や保護者とのやり取り等々、いわゆる「何でも屋」です。今では法体系が変わりましたが、総称して区別しています。

学生時代の友人たちから、「どんな仕事をしているの?」という質問を受けますが、「福祉関係」と言う「介護?」と必ず言われます。一言で説明するのが難しい仕事だと感じています。

新人のころ、先輩職員から「生活係は一日に何度もトイレ掃除をするように」と教えられ、朝から夕方まで、利用者さんが作業に出かけた後の寮内で、もくもくと掃除をしていました。利用者さんと関わる時間も少なく、トイレ掃除、掃除機がけ、モップがけ、窓掃除、シーツ付け、そしてまたトイレ掃除と…。作業係に配属された同期の職員は、利用者さんと一緒に楽しそうに作業をしており、正直うらやましく思ったこともあります。



もちろん今でも「ハウスキーピング」は基本だと思っていますが、正直なところ、年数を重ねることに保護者からの相談や、行政・学校とのやり取りなど対外的な仕事が増えて

きています。時には、上手く伝わったろうか、伝わらなくて誤解を招いてしまったのではないかと自問自答する日々です。一番難しいと感じるのは、一つの相談内容に対して答えは一つではなく、また、同じ相談内容でも利用者さんによって対応を変えたほうが良い場合があるからです。まだまだ未熟で先輩職員に指示を仰ぐことが多いですが、それでも、私を頼って相談してくださる方がいることがとても嬉しく思います。

また、保護者の皆様とのやり取りでも、最近はいろいろな話が出るようになり、新たに発見することがあります。

先日伺ったエピソードですが、その利用者さんは自宅に帰って三日くらい経つと、「学舎にいつ帰るのか」と確認したり、「学舎に帰る」などと話すそうです。「親として嬉しいような悲しいような…(笑)」とおっしゃっていました。でも、学舎にいる時には、逆に、自宅に帰省するのをとても楽しみにしていて、当たり前ですがやっぱり自宅が一番なのだと感じざるを得ませんでした。そのようなお話を伺うことで、ふる里学舎が生活の場のひとつになっているのだと嬉しく思います。

また、私が勤務する以前の利用者さんのご様子を聞くと、学舎に入所するときに大暴れで抵抗して職員が親御さんと無理やり引き離したとか、一旦帰省すると中々戻ってこれなかったとか、現在からはとても想像が出来ません。今では、「学舎に帰るよ」と伝えると、真っ先に車に乗っている姿に安心されているようです。

入所したばかりの時は、罪悪感や寂しさで一年間は考えると涙が止まらなかつたというお話を伺ったこともあります。どれだけの決意が必要だったかということを私たち職員は感じなければなりません。新しく

入所した方を見ると、お母さんが何度も何度も後ろを振り返り「来週末来るね」と言って帰って行く姿をよく見かけます。数年経ってそういった姿を見かけなくなると、手前味噌ではありますが、保護者が安心して預けてくださっている証だと捉えています。そういった親御さんの思いを日々感じながら接していきたいと思っています。

どんな職業についてもそうですが、楽な仕事はありません。正直「疲れた、大変だ」と思うこともあります。里見理事長によく言われます。「本当に就きたい仕事につける人は限られている、自分に合う仕事を探すのではなく、自分が仕事に合わせていく必要がある」と。親御さんの子供に対する想いを感じたり、利用者さんが学舎を好きでいてくれることが私にとってのやりがいです。

私もあの時、何かの縁でふる里学舎にやってきました。教員ではなく、この道に進んで良かったのだと思っています。

(ふる里学舎 支援員)

編集後記



大震災から一年。一歩ずつ復興を進めている姿を見ると支えあう人間の力を改めて感じます。私がふる里学舎で働かせていただいていたもうすぐ二年が終わろうとしています。失敗を重ねながらではありますが、上司や先輩方、後輩に支えられて、今、少しずつ前に進んでいると感じています。

今年は降雪が多く、寒い日々が続いています。春色の和やかな季節が桜と共に訪れることを祈り、

支援員 荒木 正樹

